

月のうさぎ インド

むかし、ある森に、いつびきのうさが住んでいました。

うさぎには、さると、山犬と、カワウソの友だちがいて、四匹は仲よく暮らしていました。

ある日、うさがいいました。

「明日は、ほどこしをする日だよ。お腹が空いた人に会ったら、自分の食べ物を分けてあげようよ」

「うん、そうしよう」と、みんなはいいました。

つぎの日、カワウソは早起きして、ガンジス川にえものをさがしにでかけました。ちようどその朝、漁師が、釣った赤魚を七ひき、くしにさして、川岸の砂の中にかくしておいて、ほかの魚をさがしに行きました。そのあと、カワウソがやって来て、その赤魚を見つけました。カワウソは、大きな声で、

「この魚はだれのですか」といいました。三度も呼んでみましたが、だれも現れません。そこで、くしごとくわえてすみかに持って帰りました。

「お昼になったら食べよう」

そう思っているうちに、カワウソは眠ってしまいました。

山犬も、えものをさがしに出かけました。歩きまわっているうちに、田んぼの中の番人小屋にやって来ました。テーブルに、肉ふたくしと、オオトカゲと、牛乳の入ったつぼが置いてありました。山犬は、大きな声で、

「これはだれのですか」といいました。三度も呼んでみましたが、だれも現れません。そこで、牛乳のつぼのひもを首にかけ、肉とオオトカゲを口にくわえてすみかに持って帰りました。

「お昼になったら食べよう」

そう思っているうちに、山犬は眠ってしまいました。

さるも、食べ物进行さがしに、森へ出かけて行きました。よくうれたマンゴーを見つけたので、持って帰りました。

「お昼になったら食べよう」

そう思っているうちに、さるは眠ってしまいました。

うさぎも、食べ物をさがしに、草原へ行きました。けれども、おいしい草を見つけることができませんでした。うさぎは、しかたがないので、

「お昼になったら、寝床に敷いてあるダツパ草を食べよう」と思っているうちに、眠ってしまいました。

しばらくすると、旅のお坊さんが、この森を通りかかりました。お坊さんは、カワウソのすみかの前にやってきました。カワウソが、目をさまして、

「何かご用ですか」とたずねると、お坊さんは、

「何か食べ物をいただけるとありがたいのですが」と答えました。カワウソは、

「はいはい。おいしいものがありますよ」といって、こう歌いました。

ガンジス川の 赤魚

ここにありますが お坊さま

さしあげますから めしあがれ

お坊さんは、お礼をいうと、

「明日の朝までここに置いてください。いただきにまいます」といって、また歩いて行きました。

お坊さんは、山犬のすみかの前にやってきました。山犬が、

「何かご用ですか」とたずねると、お坊さんは、

「何か食べ物をいただけるとありがたいのですが」と答えました。山犬は、

「はいはい。おいしいものがありますよ」といって、こう歌いました。

ふたくしの肉とオオトカゲ

つばいっぱいの牛乳が

ここにありますが お坊さま

さしあげますから めしあがれ

お坊さんは、お礼をいうと、

「明日の朝までここに置いてください。いただきにまいます」といって、また歩いて行きました。

お坊さんは、さるのすみかの前にやってきました。さるが、

「何かご用ですか」とたずねると、お坊さんは、

「何か食べ物をいただけるとありがたいのですが」と答えました。さるは、

「はいはい。おいしいものがありますよ」といって、こう歌いました。

おいしくうれたマンガーの実と

冷たい水とすずしい木かげ

ここにありますが お坊さま

さしあげますから めしあがれ

お坊さんは、お札をいうと、

「明日の朝までここに置いといてください。いただきにまいます」といって、また歩いて行きました。

お坊さんは、最後にうさぎのすみかの前にやって来ました。うさぎが、

「何かご用ですか」とたずねると、お坊さんは、

「何か食べ物をいただけるとありがたいのですが」と答えました。うさぎは、大きくうなずいていました。

「今のわたしには、新鮮な草のひとつもありません。ですから、今日は、わたしがだれにもさしあげたことのない物をさしあげます。どうぞ、薪を集めて火をおこしてください。その火に飛びこみますから、わたしの肉を食べてください」

そういうと、うさぎは歌いました。

うさぎの食事はそまつな食事

ごま、まめ、米すらありません

けれどもたき火であぶったわたしの肉が

ここにありますが お坊さま

さしあげますから めしあがれ

お坊さんは、これを聞くと、黙ってうなずいて、火をおこしました。うさぎは、火に近寄ると、火に向かっていいました。

「もしわたしの毛の中に、のみやしらみなどの生き物がいたら、けっして焼き殺してはいけないよ」

それから、体を、二、三度ぶるつとふるわせて、火に向かって飛びあがりました。

うさぎは、ほほえみを浮かべて、まるで白鳥のように火の中に飛びこみました。ところが、どうしたことか、真つ赤な火は、うさぎの毛あなひとつ焼くことができませんでした。うさぎはおどろいてお坊さんにいいました。

「あなたのおこした火は、まるで雪ゆきのように冷たい。これでは、わたしを焼くことができません」

お坊さんは、

「どうかゆるしてください。あなたのやさしさがほんとうかどうか、試ためしたのです」といいました。そして、

「あなたのりっぱおこなな行いが、世界せかいじゅうに知れわたりますように」というと、まわりの山々に手をさしのべて、山をぎゅっとしめつけました。すると、山の汁しるがにじみ出ました。お坊さんは、その汁で、月のおもてにうさぎの絵えすがたをかきました。

それからというもの、月夜の晩ばんには、みんなで森の広場に集まって、月をながめていました。

「うさぎさん、あなたとそっくりのうさぎが、ほら、お月さまの中にいるよ」
おしまい

村上郁再話

資料『ジャータカ物語1《仏教説話選書》』中村玄・増谷文雄／鈴木出版